南東アラビア山麓峡谷における人間活動を探る
—オマーン、タヌーフ地区における考古学調査(2023～2024年)—

黒沼　太一　東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所助教
三木　健裕　慶應義塾大学文学部助教
田邉幹太郎　東京大学大学院人文社会系研究科博士課程
近藤　康久　総合地球環境学研究所教授

Exploring Human Activities in a Canyon of Southeastern Arabia: Archaeological Investigations in the Tanūf District, Oman in 2023–2024

KURONUMA, Taichi　Assistant Professor, Research Institute for Languages and Cultures of Asia and Africa, Tokyo University of Foreign Studies
MIKI, Takehiro　Assistant Professor, Faculty of Letters, Keio University
TABABE, Kantaro　Doctoral Course Student, Graduate School of Humanities and Sociology, The University of Tokyo
KONDO, Yasuhisa　Professor, Research Institute for Humanity and Nature

1. はじめに

アラビア半島南東部(今日のオマーン国北部及びアラブ首長国連邦)は、内陸砂漠とその北縁を画するハジャル山脈、およびインド洋・オマーン湾・アラビア(ペルシア)湾沿岸地帯からなる。ハジャル山脈の山麓部では、インド洋から飛来するモンスーンの影響により、利用可能な水資源が比較的多くもたらされている。砂漠気候にありながらも水資源に恵まれるというこの特徴的な地理的条件下で、人と自然の関係性がどのように変動したのかを捉えるため、発表者たちは2017年からハジャル山脈南麓のタヌーフ地区(**図1**)における考古学調査を実施してきた。2023－2024年は前年から引き続き広域踏査を実施するとともに、新たな地点で発掘調査を開始した。本報告ではその最新成果を紹介する。

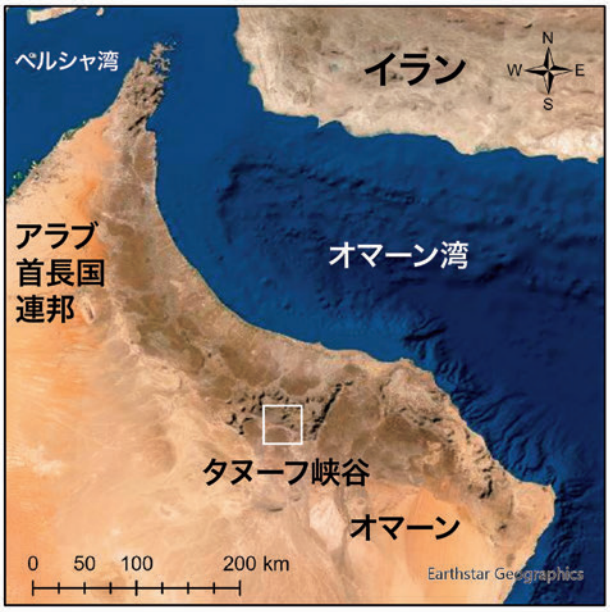

図1　タヌーフ地区の位置。

2. タヌーフ地区におけるこれまでの考古学的発見と2023～2024年調査の目的

タヌーフ地区は峡谷(タヌーフ峡谷)とその出口付近に広がるワーディー・アル＝アビヤドの沖積地からなる、概ね25 km^{2}ほどの範囲を指す。この地区は豊富な水資源を擁するが、前期青銅器時代ハフィート期(前3300～2700年頃)の積石塚4基、同ウンム・アン＝ナール期(前2700～2000年頃)の円形基壇2基が踏査され、岩絵が複数知られるのみだった。

発表者らは、タヌーフ峡谷で踏査を開始し、中期青銅器時代ワーディー・スーク期(前2000～1600年頃)に古代の人々が逗留した痕跡をムガーラトゥ・ル＝キャフ洞穴遺跡(WTN01遺跡)で発見・調査したことで、約4千年前から峡谷が人々の移動路であったことが明らかになった。約4千年前は紀元前2200年ごろに始まった乾燥化の影響で社会の遊動性が増した時期と見られており、洞穴利用は南東アラビア全体での人と自然の関係性の変化と整合的に捉えられた。また峡谷内外では、新石器時代からイスラーム期に至る合計34箇所の遺跡を前シーズンまでに踏査・登録してきた(黒沼ほか2024)。2023-2024年は、ワーディー・

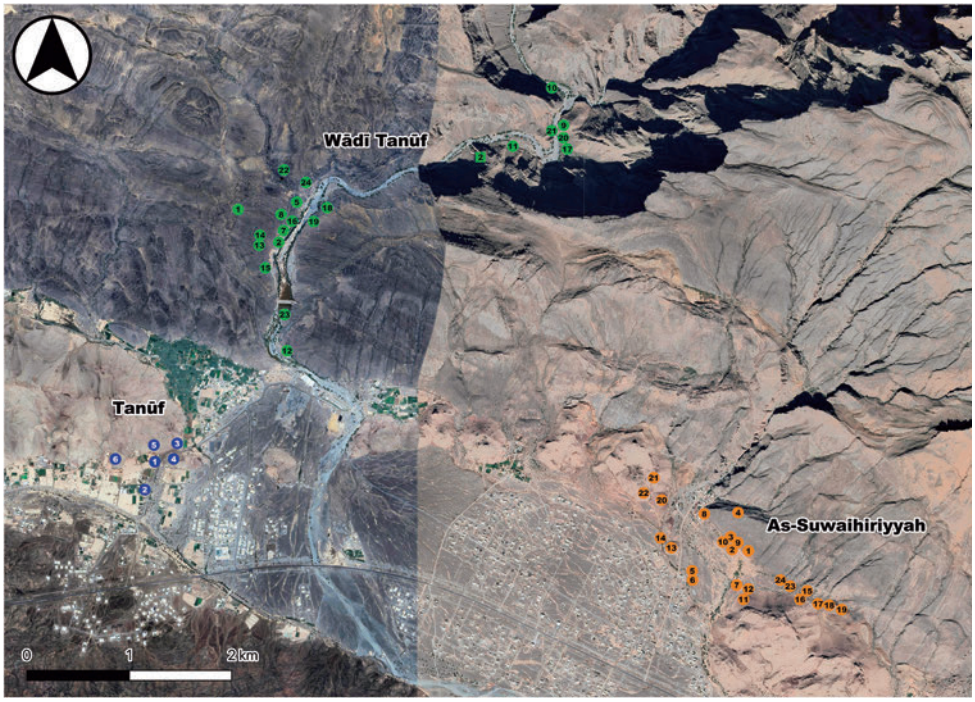

図２　2023-2024 年調査終了時のタヌーフ地区における遺跡の分布。

スーク期の埋葬活動と、峡谷内外での考古学的景観の変遷への理解に関する解像度をより高めるため、広域踏査と発掘調査を継続した(**図 2**)。

3. 広域踏査

タヌーフ峡谷内の 13 遺跡(WTN02・WTN07・WTN08・WTN15-WTN24)、峡谷外のタヌーフにある 2 遺跡(TNF05・TNF06)、峡谷から南東約 4 km にあるアッ=スワイヒリーヤ周辺の 15 遺跡(SWH04・SWH08・SWH11・SWH12・SWH15-SWH25)を踏査し、遺構と遺物を記録した。以下、顕著な発見物を記載する。

峡谷内では河岸段丘・中位の緩斜面、高位のテラス上などで遺構を確認できた。峡谷の河床から比高差約 140 m ほどのかなり高位に位置するテラスでは、崖線のすぐ脇で遺存状態の良いハフィート期の積石塚(WTN22 遺跡第 1 号墓)を発見した(**図 3**)。遺存状況は峡谷内で良い部類に属し、入り口がやや残存するほか、二重の外壁構造が明瞭に観察でき、内郭部分の頂部が残存していることを確認した。また河床から WTN22 遺跡へ至る急斜面にも恐らく同時期の墓を含む WTN24 遺跡があり、峡谷内の高位でもハフィート期に墓が構築されていたことが分かった。

比較的高度の低い、中位の緩斜面や河岸段丘では前期鉄器時代(紀元前 1300-300 年)の墓も確認できた。峡谷の奥地に存在する WTN17 遺跡では、円形～楕円形の平面形を有する、遺存状況の良い積石塚群を発見した。これらの墓は、ハフィート期墓として英国人写真家のブログで紹介されたが(Lockwood 2014)、高さ 1 m ほどで墓室上面を平石と礫で閉塞する工法で、連接して複合体を構成する事例もあることから(**図 4**)、鉄器時代の積石塚と判定できた。

また、WTN17 遺跡から河床を挟んでほど近い場所の岩壁に、岩絵パネルの WTN21 遺跡を確認した。本遺跡は、過去に一部の写真が公表されていたものの場所が詳らかでなく(Fossati 2019)、今回の踏査で特定できた。岩絵は様々な絵から構成され、中にはコブウシ確認できた(**図 5**)。コブウシは南東アラビアに生息せず、紀元前 3 千年紀に南アジアとの往来が盛んに

図 3　WTN22 遺跡第 1 号墓。

図4　WTN17遺跡鉄器時代連接墓の一例。

図5　WTN21遺跡コブ牛などの岩絵。

なると物質文化に表れるため、絵もこの時期に遡る可能性がある。岩絵の中には太陽と思しき意匠もあり、類例から青銅器時代以前に年代が遡る可能性がある。鉄器時代などに典型的なラクダ乗りの絵もあるため、この遺跡では断続的に岩絵が描かれた可能性が高い。

峡谷外のタヌーフでは、急斜面上に基壇を設けその上に墓部分を構築するという特異な構造のハフィート期積石塚4基（**図6**）をTNF05遺跡にて発見した。一部の墓の脇には、土留め壁や、壁龕のような遺構（**図7**）も見つかった。基壇付積石塚や付属施設は、非常に特異である。

アッ＝スワイヒリーヤでは、ハジャル山脈本体と別の地質からなる丘陵の間で、2基のハフィート期積石塚からなるSWH18遺跡を発見した。第1号墓は一部崩落があるものの、そのほかは完全な遺存状態を保っており、通常は崩壊により観察不可能な頂部を含む全ての部位で元来の構造を捉えられる（**図8**）。南東アラビア全体でも最高レベルの遺存状態を保つ事例であり、ハフィート期の積石塚構造の解明に大きく資する資料と評価できる。

図6　TNF05遺跡基壇付ハフィート期積石塚の一例。

図7　TNF05遺跡壁龕状遺構

図8　SWH18遺跡第1号墓。

4. 青銅器時代墓の発掘調査

前シーズンまでに調査したムガーラトゥ・ル＝キャフ遺跡との関係性を探るため、ワーディー・スーク期の墓と推定されるWTN13遺跡第34号墓及びWTN07遺跡第122号墓を発掘した。

WTN13遺跡第34号墓は、発掘調査の結果、部分的に二重の周壁を有し、やや楕円形に近い平面形の墓室であることが分かった。墓室部分にはほとんど掘り

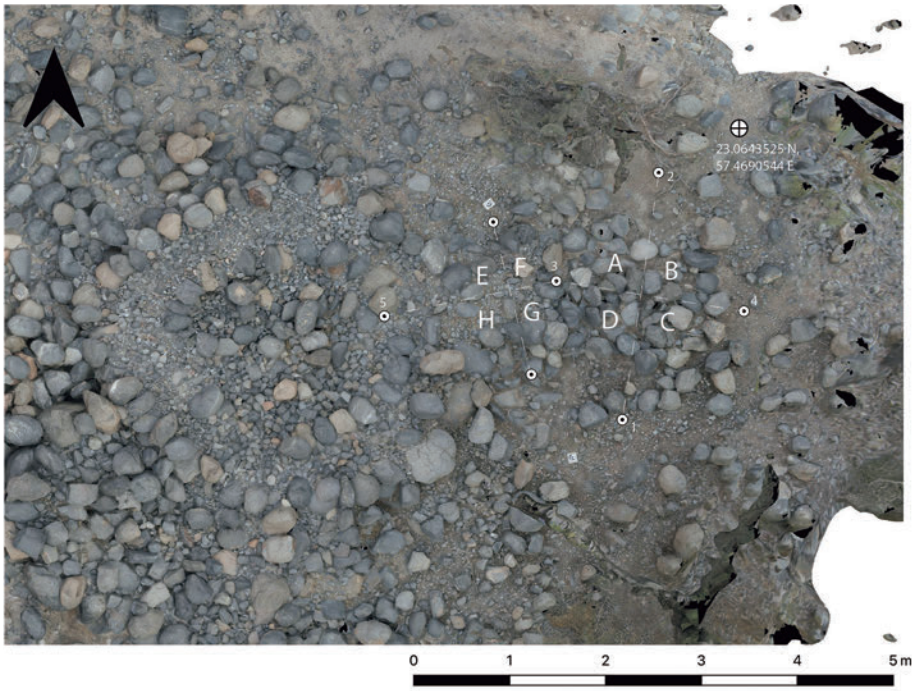

図 9　WTN07 遺跡第 122 号墓(2023-2024 年調査終了時点)。

込みを確認できず、遺物も微小な土器片を除いて見つからなかった。墓の形態という点ではワーディー・スーク期と評価できるが、具体的な時期は発掘調査からは特定し得なかった。

WTN07 遺跡第 122 号墓は、オマーンでは珍しいワーディー・スーク期から前期鉄器時代の集葬墓と推定できる(Kuronuma et al. 2024)。今回は本体部分を発掘せず、北東部分の突出箇所を調査した。その結果、この部分はやや接続角度の異なる 2 つの楕円形の構造物からなることが分かった(**図 9**)。両構造物は完掘したが、前期鉄器時代を主体とする土器片 9 点しか出土しなかった。また昨年の踏査時点では、類例などからこの箇所を墓室本体へとつながる羨道と想定していたが、発掘調査では墓本体への入り口を確認できなかった。従って、墓に付属する施設ではあるが、独立した遺構と判断できる。

5. 鉄器時代城砦の三次元記録

アッ＝スワイヒリーヤの独立丘に所在する城砦 SWH06 を対象に構成構築物の三次元記録を実行・完了した。その結果、SWH06 城砦は合計 13 の構築物から構成されることが分かった(**図 10**)。構築物は麓に分布する矩形エンクロージャー遺構群と、丘上に平坦面を形成する石垣からなり、後者のうち第 12 号遺構は特に遺存状況が良い。また麓の第 5 号遺構では、排水路である可能性のある遺構も見られた。また、墓と見られる遺構も 8 基見つかっているが、城砦全体を通じて採集可能な遺物はほとんどなく、時期決定は難しい。SWH06 城砦の記録完了後、SWH13 城砦の記録に着手しており、来シーズンも継続予定である。

6. まとめ

2023-2024 年調査では、昨シーズンに続き多くの重要な発見があった。いずれも峡谷とその周辺における人と自然の関係性の長期的変化、景観の変容を解き明かす上で貴重な資料となる。広域踏査では特にハフィート期の積石塚研究に資する資料を記録できた点が意義深い。また連接する鉄器時代の積石塚も形態的に類例が少なく重要である。発掘調査では、出土遺物こそ乏しかったものの、WTN07 遺跡第 122 号墓の構造や付属施設の解明に向けた一歩を踏み出すことができた。今後、古代 DNA やプロテオミクス分析など、タヌーフ地区における人類活動の変容を追跡するために必要な資料の獲得が求められる。また、城砦の調査は複雑かつ巨大な構造物の正確な記録に向けた手法の開発に寄与し得ると言える。

この調査は、JSPS 科研費 JP20J01674、JP21H00605 を受けて実施した成果の一部である。蔦谷匠氏、板橋悠氏、太田博樹氏、近藤洋平氏らにご協力を頂いた。末筆ながら御礼を申し上げる。

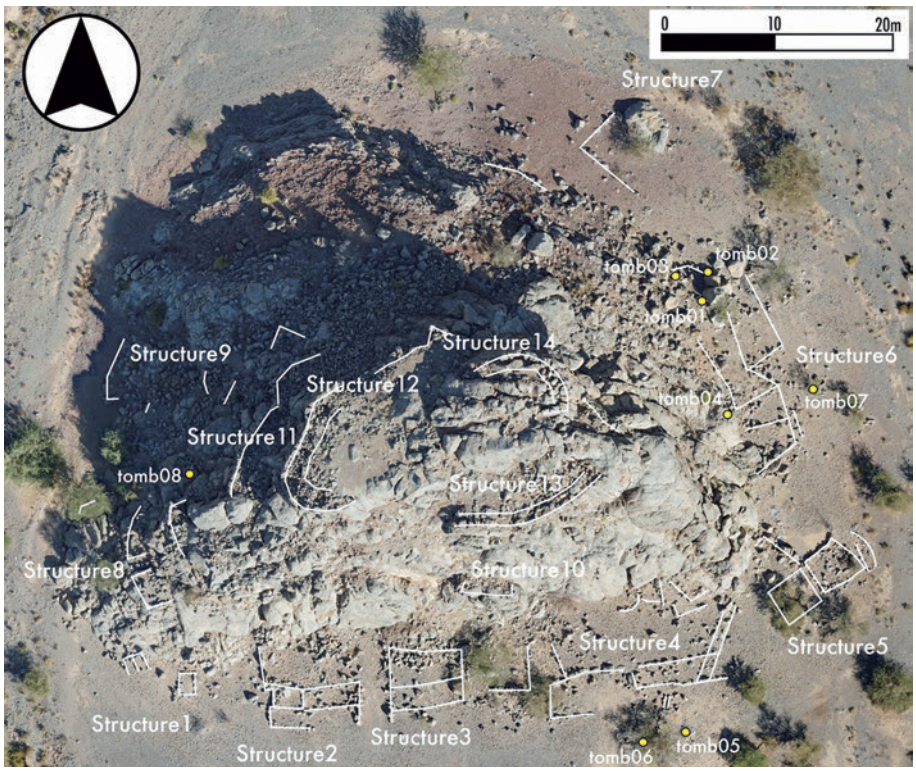

図 10　SWH06 城砦構築物。

■参考文献

・Fossati, A. 2019 *Messages from the Past: Rock Art of Al-Ḥajar Mountains*. Muscat, Ministry of Heritage and Culture.

・Kuronuma, T., K. Tanabe, T. Miki and Y. Kondo 2024 Tombs and landscapes in a canyon of the al-Ḥajar mountains. Results of the surveys at WTN07 in the Tanūf District (North-Central Oman), 2022–2023. *Proceedings of the Seminar for Arabian Studies* 53: 104–118.

・Lockwood, D. A. 2014 *Newly discovered rock art in Wādī Tanūf*. https://davidalockwoodphotography.com/2014/09/19/newly-discovered-rock-art-in-wadi-tanuf.（2024 年 12 月 20 日閲覧）

・黒沼太一・三木健裕・板橋悠・田邉幹太郎・近藤康久 2024「南東アラビア山麓峡谷における人間活動を探る―オマーン、タヌーフ地区における考古学調査（2022–2023 年）―」『第 32 回西アジア発掘調査報告会報告集』65–69 頁　日本西アジア考古学会。